

シンポジウム

第Ⅲ部 パネルディスカッション

コーディネーター

大田 幸博（熊本県立装飾古墳館館長）

パネラー

岡田 茂弘（国立歴史民俗博物館名譽館長）

佐藤 信（東京大学大学院教授）

濱田 耕策（九州大学大学院教授）

司会 お待たせいたしました。それでは、準備が整いましたので、シンポジウムに移らせていただきます。ここからは装飾古墳館 大田幸博館長に進行をバトンタッチいたします。

大田 先生方から御熱心な発表がございました。とても示唆深い内容でしたが、時間の都合上、限られた時間内で非常に無理をなさつたものと恐縮したしております。そこで、言いたりなかつた先生方もいらっしゃると思いますので、5分程度、追加がございましたら、お話しをいただきたいと思います。

先ずは岡田先生。先生からは、九州南部を統括していた鞠智城の役割がメインのお話しでしたが、その他に興味深い話題として「車路」の問題も取り上げていただきました。全体的に話し足りなかつたところもあろうかと思いますが、特に「車路」について補足していただければ助かります。先生よろしくお願ひいたします。

岡田 今、「車路」について補足を、というお話しがありますが、その前に一つ、申し上げたいことがあります。それは、なぜ文武天皇二年、六九八年に鞠智城が、大野城、基肄城といつしょに繕い収めたのか、ということです。実は、濱田先生のお話しにも関連することで、先生からもそのお話しがありましたが、鞠智城の役割を考えるう



図1 コーディネーターの大田幸博氏



図2 古代の西海道

えで重要な問題でもありますので、私のほうからも少し補足をさせていただきます。

鞠智城が繕治されたのは、五月二十五日のことでした。補足したい話題は、その直前、四月十三日の記録と、その二年後の文武天皇四年、七〇〇年の記録でございます。

文武天皇二年、六九八年、四月十三日に、大和朝廷は、務広式文忌寸博士等八人を南島に派遣いたしました。これが覓国使と呼ばれる人たちです。その目的は、南島、つまり種子島や屋久島を大和朝廷に従属させるためでした。ところが、文武天皇四年、七〇〇年、六月三日、その覓国使が薩摩で妨害されるという事件が起きました。非常に興味深いのが鞠智城の修理

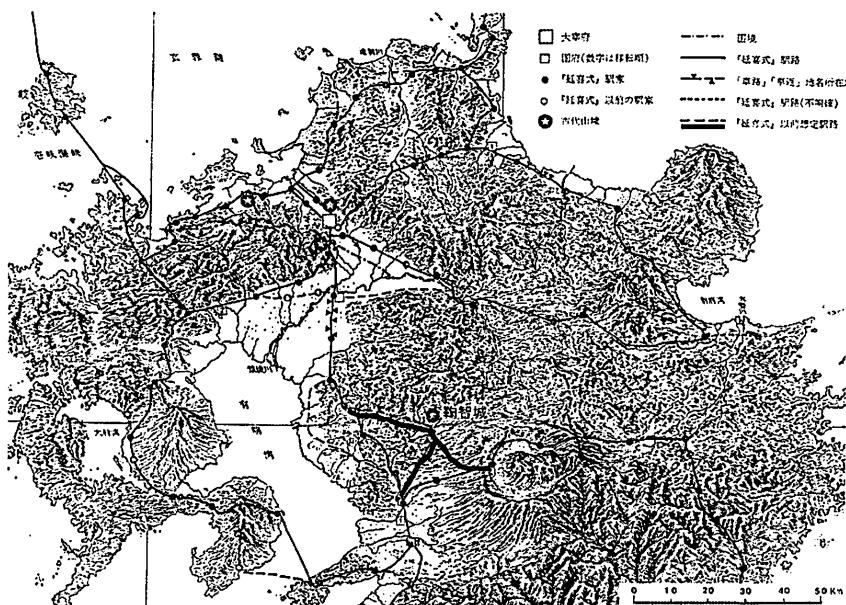


図3 古代西海道と「延喜式」以前想定駅路

(木下良 1983「西海道の古代官道について」『九州歴史資料館開館十周年記念 大宰府古文化論叢 上巻』吉川弘文館 の挿図に加筆)

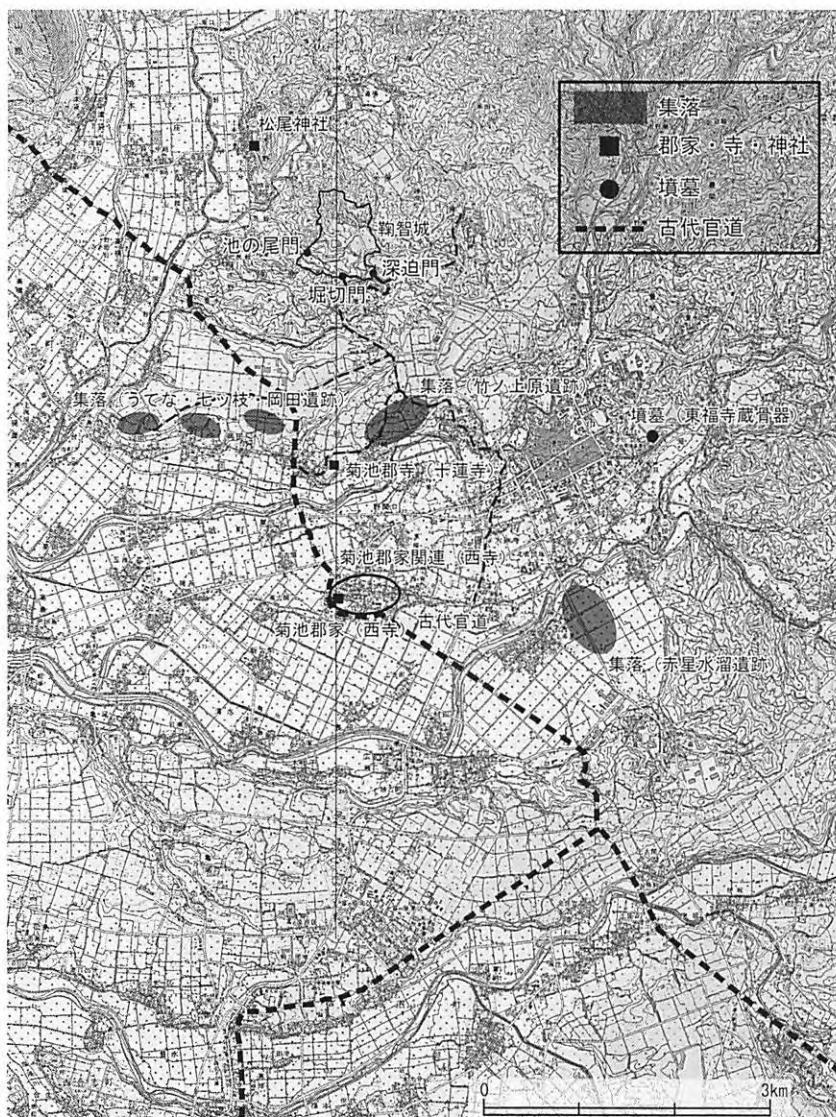


図4 鞠智城周辺の古代遺跡 (古代官道のルートについては鶴嶋俊彦 1997
「肥後国北部の古代官道」『古代交通研究』第7号 による)

が、覓国使の南島への派遣とそれが妨害された事件とほぼ同時に行われた、ということです。つまり、鞠智城の七世紀の末頃の性格を表しているという記録ではないか、というふうに考えられるわけです。これは、濱田先生もそういつた趣旨のことを述べられておりまますので、まさにその通りだらうと思いま

す。

次に、笹山先生の御講演の中でもすでに触れられていたことですが、西海道の問題です。すでに皆さん御承知のことと思いますが、この西海道は、九州全体を回っていた官道であります。延喜式には、その関係で各地の駅家が記されています。現在、この駅家を結ぶルートが西海道だ、というふうに考えられておりまして、それがどこを通っているのかという研究が歴史地理を中心として行われております。また、考古学でもたまたまそのルートに沿う遺跡で道路の痕跡が発見され、西海道との関連が取り沙汰されております。

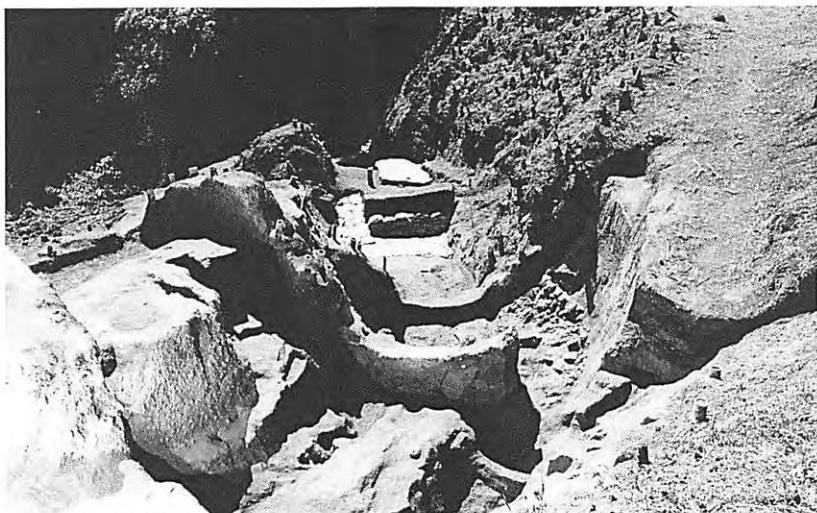


図5 堀切門跡発掘調査状況 軸くずり孔が穿たれている門礎石が見える

ところが、肥後国では、西海道とは違う道路が地名として点々と出てくる地域があります。それが山鹿郡内や菊池郡内です。「車路」という地名ですね。読み名では、「クルマジ（車路・車地）」とか「クルマジ」が訛っての「クルマジ→クルマヂ→クルママチ（車町）」というものです。日本の古代には、もともと人間が乗る車はございませんでした。そうは言いましても、「車路」と呼んでいますから、当時、何らかの車を使っていたと考えざるを得ないわけです。ですから、当時としますと、都を走っていた牛車であるとか、荷車ということになります。この「車路」という地名を追っていきますと、それが何と鞠智城に至るわけです。それも鞠智城の南、南門に当たる鞠智城の掘切門に至つていたと考えられます。つまり、鞠智城は南を向いていたわけですね。

そこで、この「車路」の行く先をみてみたいと思います。この「車路」は、鞠智城の付近で二手に分かれていたことがすでに分かっています。一つは、南に方角を変えて、肥後国府に行く道ですね。現在の熊本市へ行く道です。もう一つは東の方に分かれて、豊後国の南部、つまり今の大分県の南部を通つて日向国に至る道です。

この鞠智城が築かれ、そして繕治された頃、大隅は、まだ日向国に属していました。また、薩摩国は、当初は唱更国、ハヤヒトコクと私は読んでいるのですけれども、この唱更国とされました。この唱更国が置かれるのは大宝二年、七〇二年のことでしたので、当然まだ無かつたわけですね。そういう地域ですから、九州の南の方は、隼人の地であり、まだ倭の国に入つていないという段階だったのではないでしようか。その段階に鞠智城が築かれ、繕治されたわけです。しかも鞠智城は、南を向いています。鞠智城と九州南部との間に何か関連を窺わせてくれて、興

味深いものがあります。そんなことで、私は、鞠智城の南にある、車路、官道との関連で考えたわけです。以上です。

大田 今の岡田先生のお話しでございますが、鞠智城がなぜ南を向いているか、と従来から問題点が提起されておりました。白村江の戦いで敗戦を受けての守りのためですと、当然北を向いていなければいけない、というような話しになります。その関係上ですね、車路との関係をここ十数年来取り出されておりますけれども、いろんな新資料が出ておりまして、先生の方から、そういう方面でのお話しを伺いました。次に、佐藤先生にお願いしたいと思います。佐藤先生は、西海岸を含めた、九州の烽のネットワーク、あるいは八世紀、あるいは九世紀の鞠智城の性格について、非常に詳しくお話しいただきました。特に八世紀の大宰府との関係、肥後国司との関係、菊池郡との関係などのお話しをしていただきました。補足がございましたら、お願ひいたします。

佐藤 他の先生方のお話しも含めて考えますと、鞠智城の役割というのは、大陸・半島との関係、つまり対外的な関係、あるいは南九州に向けての関係、あるいは南島に



図6 パネラーの佐藤信氏

向けての関係と多岐に亘っていることが想定されています。それと同時に、私がお話ししましたように、律令国家の中央政府との関係ですとか、あるいは大宰府との、国司と地元との関係ですとかがあつたのだろうと想定できます。つまり私が言いたいのは、その鞠智城の果たした機能が単質ではなくて、時代によつて重層的といいますか、複合的といいますか、幅広い機能が展開していくことがあり得るのかな、ということです。それぞれの時代で、いろんな交流関係の中で、鞠智城の歴史が展開していくのではないかということをこれから考えなくちやいけないと強く感じております。

そこでお願いしたいのは、鞠智城の建物の変遷を具体的に整理していただきたい

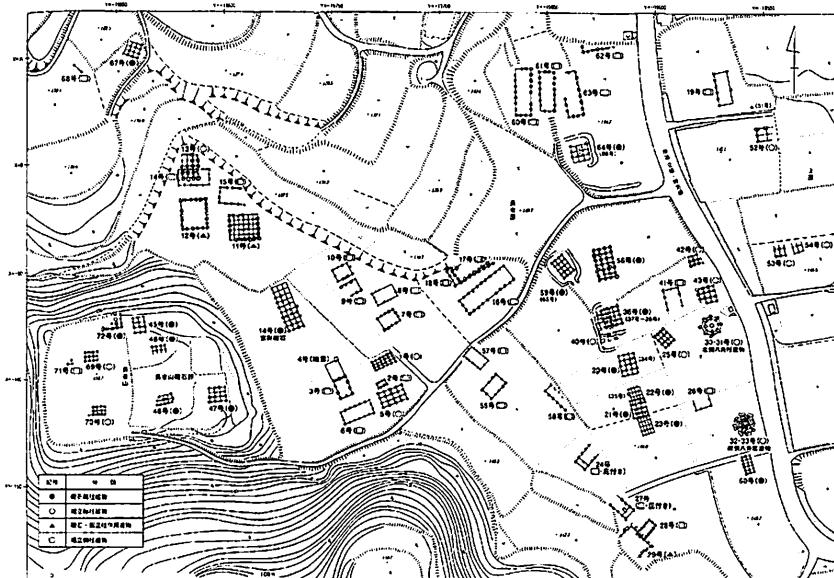


図7 長者原地区の建物検出状況

ということです。発掘調査の成果として、例えば倉庫群を大田先生は、四期に分けて考えられておられました。小形の掘立柱建物の時代から大形の掘立柱建物の時代になり、次に小形の礎石建物の時代から大形の礎石建物の時代になるというような変遷だったかと思います。つまり礎石建ちでもつとも立派な鞠智城の姿になるのは、具体的にいつの時代になつてからかということです。また、最初の時期は、建物が小振りだったということになりますが、百濟の技術をどういうふうに使つたのか、鞠智城の技術と百濟の技術がどういう関係になるのかということです。このことは考えなくてはいけない、と強く実感しております。おそらく最初に、一番立派な鞠智城だったというイメージでは、ないのでしょうね。今日のお話しによれば、むしろ段々と立派になつていく、ということがいえるようですね。

私たちが持つてゐる鞠智城自身のイメージと、私たちが持つてゐる日本古代史のイメージ、あるいは律令国家のイメージというのが、当然リンクしていくと思うのですが、そのことに関して、鞠智城がどういう研究成果、調査成果を発信できるかが問題になつていくのかなあ、と感じております。

大田 今、佐藤先生から御質問等がございましたので、建物の建て替えについて簡単にお答えします。鞠智城では七十二棟の建物跡が出ておりますが、たまたまある一つの調査区で、大形掘立柱建物、それから小形の掘立柱建物、それから小形の礎石建物、そして最後に大形の礎石建物という変遷を捉えることができました。この変遷ですが、最後の大形の礎石建物は、大きな礎石でありますが、地業が非常に雑で、礎石自体が傾くとか、あるいは火災にあつてているとか、あまりしつかりした

ものではなさそうです。しかも、これ
はあくまでもたまたま切り合った関係
でございまして、それを鞠智城全体に
当てはめることはできないと考えても
おります。この他、鞠智城の七十二棟
の建物後を精査しますと、もつとしつ
かりした大形基礎石建物があります。で
すから、一概に四時期がそのまま鞠智
城の変遷に当てはまらないのかもしれ
ません。

また、冒頭説明をいたしましたが、
建物が建つていた所が昭和四十二年の開

田事業によつて地山まで削られておりました。またそこが田圃や畠として利用されておりました
ので、なかなか遺構の前後関係が掴めないところもありました。なかなか難しいところもありま
すが、佐藤先生からそういった御質問等がございましたので、もう少し私どもの方で調べたいと
思います。

さらに、佐藤先生からは、非常にりっぱな成果が出ているわけですが、情報発信ができるいな
いというご指摘もいただきました。これまた私たちの怠慢でもございます。とにかく今一生懸命、

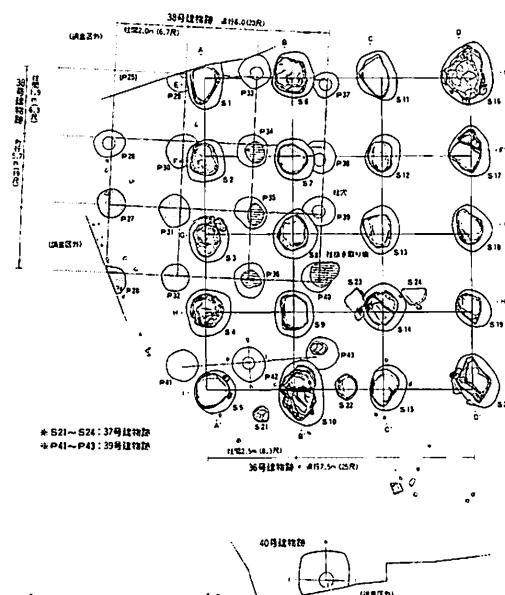


図8 建物跡の建て替え状況
36号～40号の建物跡が切り合っている。その変遷は、
40号→39号→38号→37号→36号。

P.R.に努めたいと考えております。

それでは、濱田先生、お願ひします。

濱田 先ほどの岡田先生のお話しに関連しまして、補足をさせていただきます。例えば、覓国(アマガミ)の使者、あるいは「其度感嶋通中國、於是始矣(その度感嶋の中國に通うことはより始まる)」という、記録にあるような大和政権に通う南島からの使節がいます。例えば、彼らの通行路にこの鞠智城が含まれていたり、あるいは肥後国(ヒガノクニ)の国衙(クニヤ)や官道(クニミサシ)が彼らの通行路に当たっていたりするとすれば、それぞれの使節が都に上がりつて行くまでの間、日本の国の様子を見たりします。そこで彼らは、律令体制(リョウモンシテイ)が整つてていることを感じたりするかと思います。その反面、律令国家(リョウモンノカク)の威容(イイムツ)といいますか、威風(イイフウ)といいますか、そういうふたつ雰囲気(ムカシキ)を相手側に感知(シキ)させるという機能(ノウモン)が期待(イカヒテ)しているかとも思います。実は、鞠智城(クニシマツ)の豊かな建物(ヨコハタケモノ)等々にも、そのことが言えるのかどうか、それが気になります。

と申しますのも、八世紀、日本から新羅(シンラ)国に遣わされた遣新羅使(センラシ)のことが思い浮かびます。当時、彼らがなかなか渡海したがらないケースがあつたようです。それは、新羅が自国中心(ジコウチキ)姿勢(シマツシテイ)であつたし、大和政権(ヤマハタケン)の方も自国中心主義(ジコウシンジスム)であつ



図9 パネラーの濱田耕策氏

たということと関係してお
ります。お互いに自國中心
主義を持つてゐる者が出
会つた時に、それが障害と
なつて、外交がうまくいか
ないケースがあつたような
のです。

遣新羅使が新羅の都に行
くルートには、今の蔚山か
ら入りまして、蔚山広域市
北区の泉谷洞と慶州市外東
邑毛火里の境に閑門城とい
う長城があります。この閑
門城は、七二二年、統一新
羅が日本の侵攻に備えて築
いた、万里の長城のような

石城です。新羅の都、金城の二十キロほど南の地点に、東西十二キロほどの城壁が残っています。また、その石城の東側の山の上に新垈里城という大きな円形の山城があります。遣新羅使はその

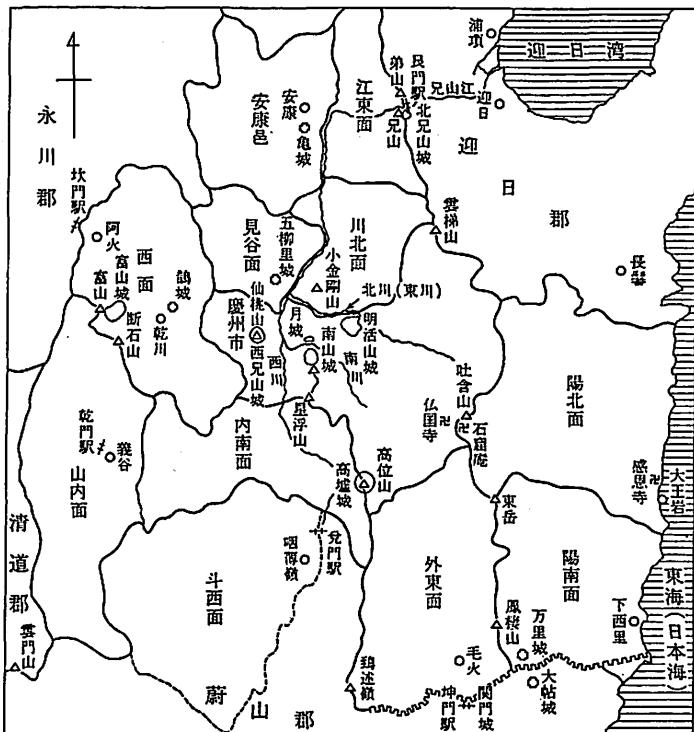


図 10 新羅王都（金城）周辺の山城配置状況
 （井上秀雄 1981「遺跡分布からみた新羅の城郭」『新羅と日本古代文化』吉川弘文館 第4図を転載）

関門で入国手続きを取り、そして新羅の都に入るわけです。その都に入りますと、北側に北兄山城、東側に富山城と西兄山城、南側に南山新城と、活山城、南側に南山新城と、都を取り囲むように石造りの山城、石城が聳えていることが分かります。まさにそこが中国（中華）であるかのような感じを受けさせるわけです。

このように、覓国の使者、

あるいは南島勢力を威武するという側面で、鞠智城の構築のあり様というのが考えられないのですね。それがちょっと気になるところです。

もう一つは、今福岡に住んでいながら、福岡に帰ると叱られそうですが、大宰府中心に考えるということを時々止めてみても良いのではないか、ということです。地方中心で考えてみて、また大宰府中心に戻る、ということも大事じゃないかと、鞠智城を考えながら思つた次第です。

（奈良国立文化財研究所・朝日新聞社「平城京展」所収）

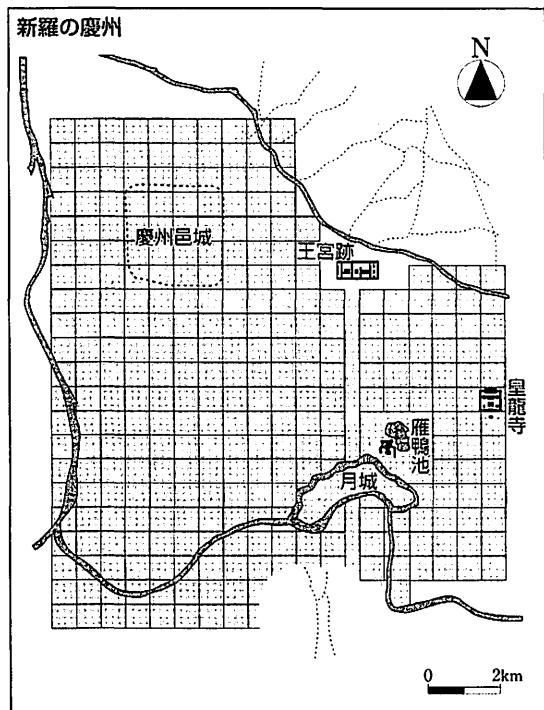


図11 新羅王都（金城）

（岡田茂弘監修 2002『復元するシリーズ② 古代の都を復元する』学習研究社 より転載）

大田 先生方とは、シンポジウムの前にいろいろと打ち合わせをしました。その中で、鞠智城は、大原則は古代山城であります、それが九世紀の後半まで残つていくことが話題になりました。やはり多面的な要素を時代的な変遷の中で考えなければ、説明がつかないのではないか、ということになりました。

これまで、先生方のお話しを伺つてきました。そこで、時間が無く恐縮です、先生方に質問が来ております。

【質問二】

鞠智城は、大野城等との後方支援基地（武器・食料）としての山城なのか、それとも有明海を意識した城なのでしょうか。肥後国府は有明海を意識して変遷したと聞いています。というものです。この件につきまして、岡田先生、いかがでしょうか。

岡田 今の御質問の中の前段の方ですね。皆さんは、大野城の性格をご存じだと思って言わなかつたのですが、大野城とうのは、基本的には朝鮮の山城と同じものです。つまり、敵に攻撃された時に逃げ込む所なのです。この逃げ込み城という考え方を李進熙さんが書いておられます。要するに、戦時 下、敵に集落を攻撃されると、一家を挙げてみんな山へ逃



図 12 パネラーの岡田茂弘氏

げ込むわけですね。その逃げ込む所が城だという性格を持つて いるわけです。

大宰府の周辺には、背後に大野城があつたり、東に宮地嶽があつたりします。ところで、この宮地嶽は、新しく発見された山城として、文献には全く出てきませんから、定義からいうと神籠石になるのでしょうか。大宰府周辺の人々は、いざ有事の際には、この三つの城に分かれて多分逃げ込んでいたのではないかと考えられます。朝鮮式山城というものは、当然、そういう性格ですから、それらの支援のために鞠智城があるということは、ちょっと考えられないのではないでしようか。ただし、大宰府のために鞠智城が存在するということは考えられると思いますよ。

もう一つは、大野城、基肄城などでは武器倉や米倉があることは分かつて いるのですが、行政的な施設があつたというのは今のところ分かつていません。これは調査が行き届かないから分からぬといふ面も確かにあるとは思いますが、その一方で、そうではないといふ面もあるのではなかると考えておきます。先ほど鞠智城を紹介したDVDで皆さん御覧になられたと思います。それを観ますと、実に広々とした平坦面が鞠智城にあることがお分かりになつたと思います。実は、あれに匹敵するような平坦面が大野城にも基肄城にもございません。非常に深い谷が中を通つて いるわけで、その出口のところに水門や城壁があるわけです。ですから山の斜面に狭い平坦面をこしらえて、そこに倉が並んでいる、というのが大野城や基肄城の内部構造なのです。

これに対して鞠智城では、広々とした所に役所的な掘立柱建物が並んで いるわけです。これは一体何のためだ、と申しますと、私は考古学者ですから、関連する他の遺跡から考えることにし

から始めたわけです。

東北の古代城柵だつたわけです。そういう発想

念ながら九州の古代山城の中には、類例があり

ません。そこで、その類例を敢えて求めたのが

ています。まあそれで考えようとしますが、残

東北の古代城柵について、時間の関係で説明を外しましたので、ここで少し説明をさせていただきたいたいと思います。例えば多賀城というの

鞠智城は、大野城や基肄城とは異なって中央部に広い平坦地（長者原）がある。この平坦地一帯から72棟の建物跡が検出されている。



図 13 鞠智城（上）・基肄城（下左）・大野城（下右）

が宮城県にあります。これは陸奥国の国府の所在地です。それから九世紀になりますが、胆沢城というのが岩手県にあります。ここは、坂上田村麻呂が築いた城で、これは鎮守府が入っていた城です。つまり、両方とも行政機関が入る城です。この特徴は、秋田城も同じであります。秋田城もある時期には、出羽国の国府が入っていました。東北では、こういう行政機関の入る城が築かれていたのです。

ところで、九州の古代山城の中では、鞠智城がどうも行政機関的な施設があるらしいのです。まだ半分しか掘つていませんので、分からな

そらく全部掘ればこのことを実証できると思いません。ただし、後の半分は農地の中に入つてますし、ど真ん中を道路が通つ

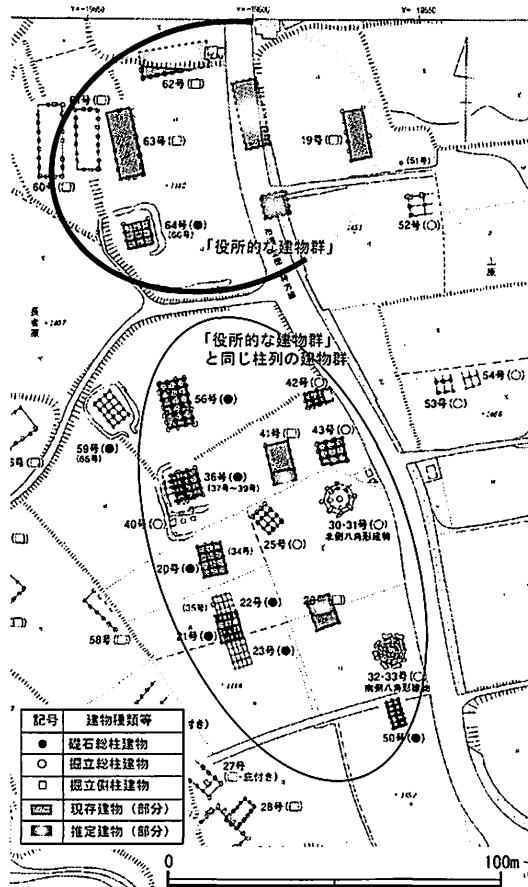


図14 「役所的な建物群」(管理棟的建物群)とその周辺の建物群

ていますので、残念ながらちょっと掘りようがないらしいのですが。

このようなことから考えますと、やっぱり九州の古代山城の中だけで鞠智城の役割を考えたのでは、解決のできない問題があるのでないか、と思うわけです。

そこで、「鞠智城に行政機関的な施設が入っていたのは、何のためだ」というのが問題になるわけです。それを解決するものに、幾つかの検討課題がございます。一つは文武天皇二年の、先ほど申し上げたような南島との関係がございます。またもう一つは南島との間に実は隼人がいまして、隼国使が南島に行くのを妨害している隼人との関係がございます。大宝律令ができた直後に薩摩で反乱がおこりました。大和朝廷はそれを制圧するなかで、後の薩摩国である唱更国を設置しました。その時、九州南部の、政治的な、律令国家の施策の拠点になつたのが鞠智城だったのではないだろうか、と考えているわけです。

東北では、多賀城の北側に胆沢城が築かれますと、それまで多賀城にあつた鎮守府が胆沢城に移されました。なぜ移されたかと申しますと、それまで蝦夷の土地であつた所を本格的に開発し、律令国家体制に組み入れるためです。律令国家体制に組み入れるための行政的な中枢機関が胆沢城に移された訳ですね。

それと同じようなことが九州でもあつたのではないでしようか。九州南部を行政的に治めるのは、おそらく大宰府が中心だつたはずですが、その出先機関である鞠智城が役割の大きな部分を担つていたのではないか、と考えているわけです。

大田 ありがとうございました。考古学的な立場からの岡田先生のお話しでした。

濱田先生、朝鮮古代史の御専門の立場で、この件に關していくがでしようか。

濱田 私は、鞠智城の役割を考える場合、まず朝鮮式山城の機能を考える必要があると考えています。私も若い頃はそう思っていたのですが、日本では、朝鮮式山城は逃げ城とよく言われます。しかし、それだけでは物足りないところがあります。最近、私は、敵を引き付け攻撃する、要是敵を引き付けるための山城というふうに考えるようになりました。もちろん一旦逃げるのは逃げますが、敵がやつてきた後に有利な立場で戦況を開拓するために、上がつて来た敵に対して攻撃を仕掛けるのではないかと考えております。例えば、城壁の石を上から落としたのではなかろうか、と思うくらいです。敵を引き付けて、そして反撃する、そういう性格だろうと思つています。ただし、鞠智城は、それには全く当てはまらないようですね。

岡田先生のお話は、さすが多賀城に長く勤められて、東北の城柵の知識といいましょうか、現場を踏まれた上での見解で、「なるほどな」と思いながら、先生のご説明を聞いておりました。

大田 それでは、佐藤先生、七世紀の大和政権と地域首長との関係について質問が来ております。

【質問二】

大和政権は、九州・関東などの地方首長に對して、海外出兵を指令していたのか、それとも地方首長の協力を得るというスタンスだつたのか。

というものです。佐藤先生、いかがでしようか。

佐藤 六世紀には、地方豪族は国造というかたちで掌握されていました。もともと倭の大王と地方

豪族との間には、同盟的な関係があつたと考えられます。それがしだいに支配・従属の関係に

なつていき、最終的には律令制の下で官僚制的な上下関係で統合された、と考えられます。このご質問に答えるためには、そういう変遷の中のどの段階に白村江の戦いが位置付けられるか、ということが問題になります。

例えば東国の方豪族というのは、伝統的に大王と結び付いて、大王の軍事的な基盤を形成した勢力だったといわれております。ですから、東国の方豪族の場合、動員を受けて参加するということもあつたと思ひます。

一方、白村江の戦いの前の状況を記す数少ない史料の一つに、『三善清行意見封事十二箇条』があります。これは、延喜十四年、九一四年に、従四位上行式部大輔臣三善清行が、醍醐天皇に提出した政治意見書です。その中に備中國の風土記を引き合いに出して、齊明天皇が今の岡山県、備中の下道郡にしばらく滞在したことが記されています。そこでは、「天皇詔を下して試みに此郷の軍士を徵す。即ち勝兵、二万人を得たり。天

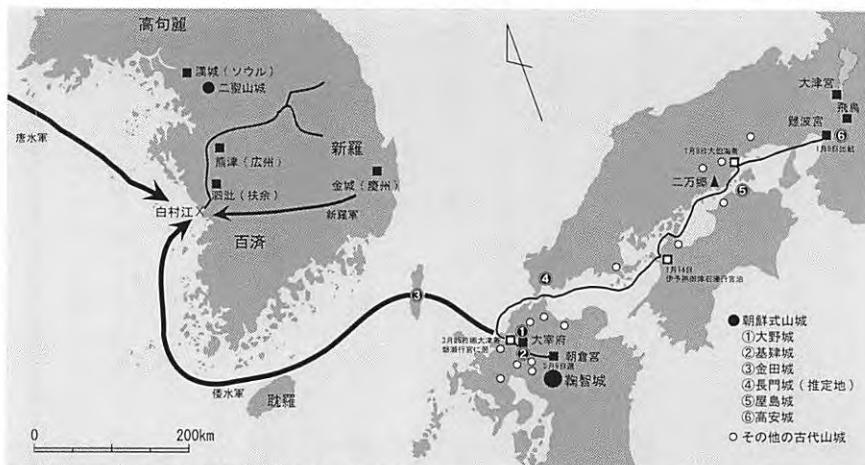


図15 齊明天皇移動経路と白村江の戦い

皇大いに悦び、此の邑を名づけて二万郷といふ。」 というように、近辺の兵士を動員すると いうことをやつていたようで、一つの村から 二万人の兵士が動員できたので、「二万（邇磨） 郷」という郷の名前ができたということが記さ れています。

その後、伊予国、今の道後温泉付近と考 えられます、熟田津に三ヶ月か四ヶ月か滞在し ています。私は、おそらくその間に伊予の地方 豪族を初めとした、四国の地方豪族を動員した のだろうと思われます。実際、伊予国の風速郡 の物部薦という豪族が参加した記録が『日本書 紀』にあります。それから慶雲四年、七〇七年 に讃岐国の那賀郡の錦部刀良が抑留先の唐から 四十四年ぶりに帰還した、という記録が『続日本 紀』にありますように、讃岐の地方豪族も参 戰したことが分かりります。

おそらくその参戦の仕方については、筑紫国



図 16 パネルディスカッションの一場面

の上陽咩郡の大伴部博麻の記録からある程度類推ができます。その中に筑紫君薩夜麻という、君という姓を持つ、筑紫君磐井の末裔に当たる有力な地方豪族の名前が見られます。そんな有力な地方豪族の配下で大伴部博麻のような人たちが参戦していることが窺えるのです。つまり、百濟復興に向けて参戦した倭の軍勢は、実体としては地方の豪族の軍を束ねたものだつたということが言えそうなのです。

要するに、大王との従属的な関係で参戦した場合もあつたでしょうし、動員されて参戦した場合も多かつたのではないのかなと思います。

実は、これが倭の敗北の一因だつたのかもしません。唐の軍勢は、律令軍制の下で整然と秩序付けられていました。今風にいえば、師団の下に連隊があつて、大隊があつて、中

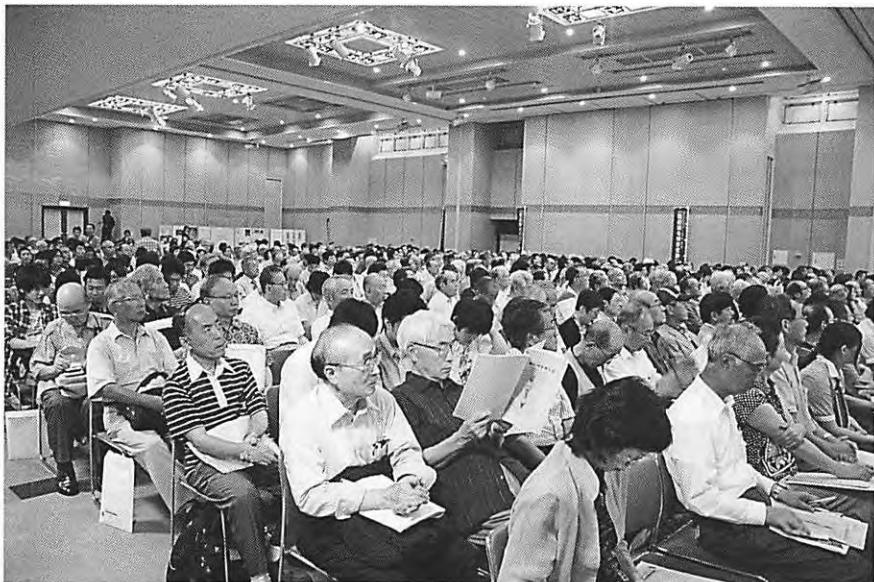


図 17 シンポジウム会場の様子

隊があつて、小隊があるというような、指揮命令系統がはつきりした組織でした。こうした整然とした軍勢に、「我先に進んでいけばどうにかなるだろう」みたいに猪突猛進で突っ走つた寄せ集め軍隊では、最初から敗北がみえていたのではないか、という気がしなくありません。

白村江の戦いの敗戦から日本列島の各地に戻つてきた、そんな地方豪族は、そのことを身にしみて分かつたのかもしれません。そんな彼らの体験が、中央集権的な国家体制を築く上で活きてきたのではないでしょうか。律令制的な官僚制を日本列島で実現するに当たつて、白村江の戦いから帰還した地方豪族は、大きな影響を与えただらうと考えております。

大田 ありがとうございました。白村江の戦いから戻つてきてから的地方豪族の働きが中央集権的な国家体制の成り立ちに繋がつていったのではないか、という非常に興味あるお話しでございました。もつともつと先生方にお話しを伺いたいのですが、時間ももうあと残り僅かとなりました。最後に、先生方から鞠智城の魅力と申しますか、少しアピールをしていただきたいと思います。

岡田先生、よろしくお願ひいたします。

岡田 すでに私の発表の中でお話しをしたわけですが、すぐ直前に濱田先生から朝鮮の山城というのは、逃げ込みだけではないといったお話しがありました。早々と修正をしなければいけないかもしれませんね。

大野城も基肄城も、どちらも国の特別史跡になつております。今まで鞠智城は、すでに特別史跡になつている大野城や基肄城と同じだ、同じだということを盛んに言つてきました。しかし考えてみますと、同じでない部分があるわけです。同じでない部分こそ、この鞠智城の特性だと

いうふうに、私は今日いろいろと申し上げたわけです。特性の一つは南を向いているということあります。南を向くための、つまり大宰府が南を経営するための拠点として、鞠智城が造られたと考えられるわけです。しかも、二百年の間、城が維持されています。

最初は、大宰府防衛のためだったかもしれません。それが七世紀の末には、違った意味を持ったのではないかと思われます。文武二年、南島の経営が必要な時に、鞠智城が修理されたということは、もうすでに変質していたからだろうと考えられます。さらに大隅国や、後の薩摩国である唱更国が作られる段階では、さらに変わった可能性があります。大伴旅人が大隅の隼人の反乱を制圧した時の記録には、残念ながら鞠智城はまつたく出てきませんが、おそらく鞠智城を経由していたと私は考へてゐるわけです。そういう点で、単なる逃げ込み城とは違う要素を鞠智城は持つていた、と考えたわけです。今こそ、その研究をすべきだうと思ひます。

と同時に、「車路」といわれてゐる道路跡の発掘は、熊本県では全く行われてゐないですね。やはり鞠智城の中だけ掘つてゐるだけでは分からぬわけです。鞠智城に至る道路の痕跡がいつもあつたのか、いつ頃に無くなつたのか、というようなことが、道路跡を発掘すれば分かつてきます。鞠智城の性格を考える上では、これが一つの大きな要素になるだう、と思ひます。また、鞠智城を経由する道路を考えますと、後の延喜式の官道、南北に走る官道はまだ無かつたはずです。ですから、肥後国府から大宰府に行くためには、鞠智城を経由しなければなりません。そういうことも考へて、熊本県内の古代をぜひ研究していただきたいと思ひます。その手掛かりが実は鞠智城にあるということ、これが魅力だと申し上げたいと思ひます。

大田 ありがとうございました。大野城や基肄城と同じでないところが鞠智城の特性であるというこ
とでした。また、「車路」を調査しなさい、という先輩としての厳しい命令がございました。頑張
ります。

大田 佐藤先生、お願ひいたします。

佐藤 今の岡田先生と同じようなことになつてしまふかもしませんが、コメントさせていただきた
いと思います。

鞠智城の性格、あるいは構造自身もおそらく性格の違いとともに変わつていつた面があるのだ
ろうと思います。鞠智城の対外的な関係、あるいは南九州との関係を初めとして、鞠智城が果た
した機能というものが重層的、複合的にあつたと思えます。その中のどれが一番重要な機能になつ
たかということになるのですが、それは時代と共に変遷した可能性があります。このことが推
定されるというのも、私自身としては面白いと思いました。それは、鞠智城が果たした機能の重
層性、複合性が、単に鞠智城だけの歴史ではなくて、日本列島の歴史全体と密接に係わつてゐる、
と思えるからです。また、律令国家の形成の歴史やその後の歴史とも密接に結び付いているとい
うことが、鞠智城の機能の重層性や複合性の研究が進めば、さらに明らかになつてくるだろう、
と思えるからです。

私は先ほどちよつと間違えて、「小形の掘立柱建物の時代から大形の掘立柱建物の時代になつて、
小形の礎石建物の時代から大形の礎石建物の時代になる」というようなことを申しました。これ
は間違いで、最初に一番大きな掘立柱建物で、その次が小さな掘立柱建物で、そして小さな礎石

建ての建物の時期から大きな礎石建ての建物という変遷が正しいということですね。その中で大田先生からは、ただ大きいからといって、構造的に立派であるとは限らない、というお話しがありました。

そこで知りたいことがあります。例えば、白村江の戦いの敗戦直後ぐらいに造られて、六九八年に大宰府をして修理させたのは、どの時期の建物跡に当たるのか、ということです。また、「不動倉十一宇火。」という、不動倉が十一棟焼けたという八五八年の記事が『日本文徳天皇実録』にありますね。その焼けたのは、どの時期の建物なのか、ということも知りたいですね。それぞれの数少ない文献で分かる時期と、考古学的な成果を付き合わせていけば、今先ほど私が面白いと思った鞠智城の変遷の中に、建物の変遷が具体的に位置付けられるだろう、と思います。そうしますと、さらにその歴史像というものが明らかになっていくのではないか、と思います。

それから、私ども日本史、古代史だけではなくて、考古学の先生もおられますし、朝鮮史の先生もおられます。それから今日お話しのあつた歴史地理学の、古代道路の研究の方もいらっしゃいます。金銅仏が、菩薩立像が出てくれば、美術史の研究対象でもあります。ということです、總



図 18 鞠智城跡で採集される炭化米

合的な研究対象として鞠智城を位置づけられるのではないでしようか。私がおそらく地元の人間であつたならば、「鞠智城」学というような言葉で表現するかもしれません。そんな鞠智城は総合的な研究対象に相応しい古代山城である、と私は言えるのではないかと思つております。

大田 佐藤先生、ちよつと言葉足らずで申し訳ございました。ただ大きいからといつて、構造的に立派であるとは限らない、と申しましたのは、最後の大形礎石建物を引き合いに出したものでした。第一期の大形掘立柱建物つていうのは、しつかりした建物だというふうに認識をしております。すみませんでした。

佐藤 はいはい。

大田 私は、『続日本紀』に初めて出てきま



図 19 百濟系菩薩立像の出土状況

す修理が非常に大規模な改築である、という認識をずっと持つておりました。けれども、それがどうも修理ということじゃないのではないか、というふうなことも、発掘の資料整理の中では出てきています。本当に佐藤先生には、いろいろ今後の課題もたくさん頂きましたので、頑張りたいと思います。

それから、最後に濱田先生、笛山先生もお書きになっています、九世紀の新羅との関係とか、海賊関係とかありましたね。それを含めて、先生の鞠智城に対する思いというのをお願いいたします。

濱田 確かに、鞠智城は、大野城、金田城、基肄城に比べても、まだ特別史跡になつてないというのはちょっと不思議に思います。基肄城は、ほとんど調査は進んでいないと思います。それに比べると、鞠智城の調査の意義ははるかに大きいと思います。

佐藤先生、岡田先生と重なりますが、鞠智城の始まりはやはり百濟の白村江の戦い以後の防衛体制だったと思います。この点は、大野城、金田城、基肄城と同じだらうと思います。そして、他の城と決定的に違うのは、二百年間も活用されてきた、という点だらうと思います。生まれは百濟式、百濟人による大宰府防衛網の中の一環として造られたわけですが、やはり南方勢力のこともあり、あるいは九州の官道との関係もあつて律令体制下の地方組織として朝鮮式山城が変化しつつ活用されたのではないでしようか。鞠智城が二百年間の歴史を持っているというのは、他のものと引けを取らないというか、それ以上のものだということを教えてくれているように感じます。

最後に、私が以前お話しした話題を、ここで披露させていただきたいと思います。「鞠智」というのは、初出の『続日本紀』の古訓では「くくち」と訓でいますが、百濟語音では、おそらく韓国語音では「Kukchi」(クックチ)です。が、百濟人の名に由来する名ではないか、と思つております。これを聞いていた韓国の方が「クックチ」というのは「国」の地、「我らの土地」だと、そういう意味だと提案しました。亡命者たちがここへやってきて、そしてここに安住の地を設けたのではないか、ということです。「国」の地、これも発音は、「クックチ」なのです。しかし、古代において、そういう表現はしないだろうと思います。「智」は新羅や百濟では人名の末尾に付ける文字です。この件は「クックチ」の由来としてもう少し追求してみたいと考えております。

大田 時間が参りました。笹山先生、岡田先生、

図 20 閉会



佐藤先生、濱田先生、ありがとうございました。また、今日はたくさん多くの方に御来場いただきましてありがとうございました。これで、鞠智城の知名度も上がつたかと思います。今後ともよろしくお願ひいたします。